

第9分科会

大学における「私語」と「沈黙」

報告者

杉原 真晃（山形大学 基盤教育院 教育開発連携支援センター 准教授）

尾澤 重知（早稲田大学 人間科学学術院 准教授）

山本 真一（京都文教大学 人間学部現代社会学科 准教授）

コーディネーター

黒宮 一太（京都文教大学 人間学部現代社会学科 講師）

大学の授業の場では、近年、学生たちの「私語」が問題とされることが少なくない。とりわけ大規模な教室でおこなわれる講義形式の授業では私語対策に苦勞しているようで、各大学ではさまざまな私語対策が講じられている。しかしながら他方で、演習形式の授業では、教師と学生、そして学生同士での活発な討論が期待されているにもかかわらず、しばしば学生の「沈黙」に悩まされていると聞く。つまり、一方で学生の「私語」が、他方では学生の「沈黙」が問題となっているのである。もともと、「私語」をやめさせ「沈黙」をなくすための対策や工夫はいくらでも可能である。だが、大学という場が学生たちに書き言葉と話し言葉を習練するための素材や切掛けを提供する場であると考えるなら、「私語対策」や「沈黙対策」も、「大学での学び」「学生たちの成長」に結びつけられたものでなければ意味のないものとなるだろう。本分科会では、このような観点からあらためて大学における「私語」と「沈黙」について考えてみたい。

<第9分科会>

大学における「私語」と「沈黙」

参加人数 39名

報告者

第1報告者 杉原 真晃 (山形大学 基盤教育院 教育開発連携支援センター 准教授)

第2報告者 尾澤 重知 (早稲田大学 人間科学学術院 准教授)

第3報告者 山本 真一 (京都文教大学 人間学部現代社会学科 准教授)

コーディネーター

黒宮 一太 (京都文教大学 人間学部現代社会学科 講師)

分科会のねらい

大学の授業の場では、近年、学生たちの「私語」が問題とされることが少なくない。とりわけ大規模な教室でおこなわれる大人数の講義形式の授業では私語対策に苦労しているようで、各大学ではさまざまな私語対策が講じられている。しかしながら他方で、演習形式の授業では、教師と学生、そして学生同士での活発な討論が期待されているにもかかわらず、しばしば学生の「沈黙」に悩まされていると聞く。つまり、いま大学では、一方で学生の「私語」が、他方では学生の「沈黙」が問題となっているのだ。

もともと、「私語」をやめさせ「沈黙」をなくすための対策や工夫はいくらでも可能である。だが、大学という場が学生たちに書き言葉と話し言葉を習練するための素材や切掛けを提供する場であると考えたら、「私語対策」や「沈黙対策」も、「大学での学び」「学生たちの成長」に結びつけられたものでなければ意味のないものとなる。本分科会では、このような観点からあらためて大学における「私語」と「沈黙」について考えてみたい。

以上のような問題意識のもと、本分科会冒頭で、あらためてコーディネーターとしての本分科会の趣旨ならびに目的を提示した。第一に、上述したように、近年の大学では、とりわけ大人数授業において学生たちの「私語」が問題視され、他方、少人数の演習形式の授業では活発な討論がわきおこらないという報告を聞く。そこで、本分科会の報告、それを受けての議論をととして、大学という学びの場の活性化のために有効な方策について問題共有することが目的である。

そして第二に、大学において「私語」が溢れ「沈黙」が瀰漫しているということは、すなわち、大学の本来の姿である言論活動の場の著しい衰弱と捉えることができる。大学は瀕死状態にあるということもできよう。そこで、「私語」でも「沈黙」でもない、活気ある言語生活を大学に取り戻すにはどうすればよいのかを参加者とともに考えること、これも本分科会での目的の一つに挙げられる。最後に、大学における「私語」と「沈黙」は別個の事柄ではなく、むしろ文明論的な問題として捉え直すべきであるという問題意識のもと、「私語」や「沈黙」にたいする対処や対策の方法を共有することにとどまらず、両者の大学における併存の意味を参加者とともに議論し、本分科会自体を活発な言論活動の場とすること、これもまた本分科会の目的であるといつてよい。

報告の概要

上記ねらいにしたがって、本分科会では、まず、「私語」や「沈黙」を、単に授業運営を滞らせるものと捉えるのではなく、「学びの契機」と捉え直すことにより授業実践をおこなっている山形大学基盤教育院の杉原真晃先生に、「授業中の私語および沈黙を問い直す 一学びの契機としての私語・沈黙」との題目で全体的な問題提起がなされた。つづいて、授業という「場」をいかに活かしていくかという問題意識のもと、大人数授業でTwitterを用いたリアルタイムでの理解状況の把握をおこなうなど、従来とは異なる技法を用いて授業中の「私語」と「沈黙」の問題に向き合っ

いる早稲田大学人間科学学術院の尾澤重知先生に、「大人数授業をいかに魅力的な「場」としてデザインするか?」との題目で授業実践例が紹介され、問題提起がなされた。最後、尾澤先生が大人数授業での実践例を紹介してくださったのに対して、京都文教大学人間学部の山本真一先生に、「プロジェクト科目事例報告 ～授業の運営方法と学生の授業態度～」との題目で、少人数の演習形式の授業における実践例を題材に、近年多くの大学で試みられているプロジェクト系の科目において授業中の「私語」と「沈黙」という課題がどのように捉え直されるかについて問題提起がなされた。以下、報告順に概要をまとめておく。

①「授業中の私語および沈黙を問い直す 一学びの契機としての私語・沈黙」(山形大学基盤教育院 杉原真晃)

本報告では、「私語」ならびに「沈黙」が発生する背景が確認された後、それらを「事前防止」や「事中・事後禁止」の対象とするのではなく、「学習観の転換」「活動の自己評価」の契機として学びへの積極的活用の対象とすることはできないか、という問題提起がなされた。詳しくは掲載されている報告者の報告資料に譲るが、以下に、配布された報告レジュメに記された報告項目を示しておく。

1. 発表の背景・目的

私語の発生／私語への対応／沈黙の発生／沈黙への対応

2. 私語を問い直す

私語の理由／私語への対応オープンキャンパス／授業評価／教育話法

3. 沈黙を問い直す

沈黙の理由／沈黙への対応数学に対する大いなる誤解(応用)

4. 私語・沈黙の、学びへの積極的活用

私語・沈黙の二つの側面／私語の積極的活用事例／沈黙の積極的活用事例

なかでも、私語と沈黙の理由の検討をふまえ、実際の授業実践例を題材にしておこなわれた、消極的活用(事前防止、事中・事後禁止等)とは異なるもう

一つの側面、すなわち、積極的活用(学習観の転換、活動の自己評価等)の具体例についての報告は、聴講者の関心の高いものであった。たとえば、報告者は、「私語」にかんして、授業テーマと関連する諸概念を説明し、学生自身のコミュニケーションや大学生活を考える機会を設けている。また、それによって、「授業に関係のある」おしゃべりや学生同士の仲間意識の形成を促している。「沈黙」にかんしては、演習形式の授業実践を例に、「うまくいかないこと」「恥ずかしいこと」を認め合える環境をつくり、「発言が苦手」「発言しなこと」のメカニズムを説明、学生に学習にかんするセルフ・マネジメントをさせている。これらの実践例は、分科会の趣旨に合致した、まさに「私語」と「沈黙」を「大学での学び」へと結びつける方法の一つといえるであろう。

②「大人数授業をいかに魅力的な「場」としてデザインするか?」(早稲田大学人間科学学術院 尾澤重知)

報告者は、「私語」や「沈黙」のみならず、内職や睡眠など、学生にとって「授業よりも魅力的な活動」といかに対峙し、それらの魅力を上回るような授業デザインをいかに実践するか、という問題意識を有している。本分科会では、自身が実践する授業例を題材に、授業でのルール(私語対策ではなく交流促進のためのルール)の適切な説明、ツール(ミニッツペーパーやTwitterなど)を用いた学生の授業参加、知識共有の促進、グループワークによる知識の応用により、共同的な活動が可能な場をデザインすることの重要性が示された。詳しくは掲載されている報告者の報告資料に譲るが、以下に、配布された報告レジュメに記された報告項目を示しておく。

1. 問題設定

2. 実践報告

3. 結果

なかでも、2. 実践報告では、自身の授業における授業評価の結果を経年で示しながら、「講義と演習、グループワークの適切な組み合わせ、連携」「ミニッツペーパーを用いた授業単位での理解度の把握とフィードバック」「Twitterを用いたリアルタイムでの理解状況の把握とフィードバック」という三つの授業デザ

インとツールの利用を柱とした授業実践の効果について検討が加えられた。とくに、方法の工夫として提示された、「挙手、机間巡視と指導、マイクでの発言」「知識伝達型と知識校正型の融合」「演繹法的展開と昨日法的展開の組み合わせ」「情報収集とフィードバック」については、豊富な具体例による説明もあつて、興味深いものであつた。また、近年の学生が慣れ親しんだ情報伝達ツールである Twitter などの授業での活用事例や、それを含めた「授業」という場でしかおこなえない活動をいかにデザインするかという問題意識とその工夫の提示は、聴講者が強く関心を寄せるものであつた。

③「プロジェクト科目事例報告 ～授業の運営方法と学生の授業態度～」(京都文教大学 山本真一)

本報告では、近年多くの大学で採用されている「プロジェクト」系の授業実践を題材に、その具体的な運営方法、それによる「私語」や「沈黙」に対する効果がデータとともに示された。報告②が大人数授業を題材にしたものであつたのに対し、本報告は少人数での演習形式の授業実践例の報告であつたため、両者の方法論の比較も可能となり、興味深い報告であつた。詳しくは掲載されている報告者の報告資料に譲るが、以下に、配布された報告レジュメに記された報告項目を示しておく。

1. はじめに
2. プロジェクト科目について
3. 授業の運営方法
4. 学生に授業態度
5. 私語と沈黙への効果

なかでも、授業テーマ(プロジェクト内容)を学生の関心を導くものに設定したり、授業内でおこなわれる問題演習を個人単位ではなくグループ単位で取り組ませたり、上回生によるスチューデント・アシスタントの活用などの工夫は、学生同士のコミュニケーションの促進に効果があつたと報告され、「私語」と「沈黙」への効果がみとめられるものであつたという。近年、多くの大学の授業でグループワークの活用が試みられているだけに、聴講者の関心も高く、とくにその運営方法を知るうえで参考になる報告であつたといえる。

報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

上記三名の報告後、昼休憩を挟んでおこなった後半部は、聴講者からの質問にたいする応答と討論、五、六名のグループによるディスカッションと報告、で構成した。順にそれぞれでおこなわれた内容を示しておく。

①報告に対する質疑応答

以下、聴講者から寄せられた質問を列挙しておく。

- ・報告①で示された私語の理由にみられる近年の学生の資質(心理)にかんするもの。
- ・報告②で示された座席指定による私語の低減にかんするもの。
- ・報告②で示されたマイクによる発言の意味を問うもの。
- ・報告②で示された授業での Twitter の活用について、大学による支援があるかどうかにかんするもの。
- ・私語する学生への退出措置の是非にかんするもの。
- ・私語・沈黙対策としての授業における競争原理の活用は是非にかんするもの。
- ・教員個人の取り組みとは別に、大学全体、あるいは学部、学科レベルでの組織的取り組みにかんするもの。
- ・授業中の「内職」の存在は質の高い講義環境の維持を可能とするかどうかにかんするもの。
- ・グループワークの工夫(たとえば、活発な議論を促すために学生に与える条件設定、グループワークが私語の機会を提供するものになることを防ぐ工夫など)にかんするもの。
- ・沈黙している学生を授業に集中させるための工夫にかんするもの。
- ・私語しなければよい(内職は許す)という対応は、私語の低減にはなるが、本質的な問題(たとえば、魅力的な授業づくりなど)を解決するものなのかどうかにかんするもの。
- ・大人数授業において対話型授業を可能にするための工夫にかんするもの。
- ・各報告で示された授業方法の教員間共有や、教員に対するトレーニングにかんするもの。

上記質問に対して三名による応答がなされたが、なかでも、報告者それぞれが実践している授業方法論にたいする関心が高かったといつてよい。同時に、質疑応答を通じて、「私語」や「沈黙」へのさまざまな方法論を採用する前提として、学生に対して「なぜ私語をしてはならないのか」「なぜ沈黙してはならないのか」を教職員がどのように説明するか、という困難な課題があることが明らかになった。そこで、残りの時間を用いて、五、六名のグループによるグループ・ディスカッションを実践した。ディスカッションのテーマは次のとおり。

- ①学生から「なぜ私語をしてはならないのですか」と尋ねられたらどのように答えるか。
- ②学生から「なぜ沈黙してはならないのですか」と尋ねられたらどのように答えるか。

いずれか一方の、あるいは両方の問いに以下に答えるかについてディスカッションし、グループごとに討論内容と上記問いにたいする応答の仕方について発表した。なお、報告者三名とコーディネーターが一つのグループとなり、聴講者と同じようにディスカッションをおこなった。教員と職員、それからわずかではあるが学生も交えた討論は、どのグループも活発に展開されたようで、それぞれの経験などから、じつにさまざまな応答の仕方が提示された。なかでも、①をディスカッションテーマとして選択したグループが多く、その答えとして、自分以外に授業をうけている学生の権利を侵害するから、というものが多くみられた。また、上記テーマから発展して、あるいは、上記テーマを問うためには、大学における授業とは何か、という根本的な問題が問い直されなければならないことがそれぞれのグループで確認されたように見受けられる。それゆえに、発表された討論内容のなかには、「良い授業とはどのようなものか」にかんするものもあった。

もともと、本分科会の「私語」（および「沈黙」）というテーマ自体が、すでに、少なくとも二十年余りにわたって議論されてきたテーマであるため、統一された応答が示されることはないのかもしれない。だが、長年にわたって議論されつづけているということ自体が、誤解を恐れずにいえば、このテーマが真剣に議論されるべき「面白」ものであることを示している。それゆえに、「大学における私語と沈黙」を大学内において議論しつづけることが、大学という言葉生活の場を蘇生させる契機の一つになるのであろう。



授業中の私語および沈黙を問い直す —学びの契機としての私語・沈黙—

山形大学 基盤教育院 教育開発連携支援センター 准教授

杉原 真晃

1. 発表の背景・目的

- ・私語の発生
 - 授業が乱れる、学びたい学生が集中できない、教員が集中できない
- ・私語への対応
 - ・私語は一時的に収まる、学習環境がひとまず整う
 - ・私語の要因が問われない、私語をしていた学生の学習意欲の低下、受動的態度の強化
- ・沈黙の発生
 - 授業が停滞する、議論が展開されない、学びが深まらない
- ・沈黙への対応
 - ・発言する学生の発生、学生参加がひとまず実現する
 - ・沈黙の要因が問われない、発言する特定の学生だけに負担がかかる、受動的態度の強化

※私語・沈黙への対応の落とし穴

教員にとって：授業計画が予定通り進む、快適 → ○

学生にとって：負担、学びが深まらない、学びからの逃避 → ×

→ 私語・沈黙を「事前防止」「事中・事後禁止」の対象とするだけでなく、「学習観の転換」「活動の自己評価」の契機とし、学びへの積極的活用の対象とすることはできないか？

2. 私語を問い直す

2-1. 私語の理由（島田，2002）

なぜ私語をするのか	%	なぜ私語をするのか	%
興味・関心をひかない	87.9	教科書を利用しない	30.1
教師ばかりが話をしている	82.4	平常点・出席点を評価しない	29.1
単位をとるためだけ	77.7	休み時間の話の続きがあった	27.4
聞かなくても単位がとれる	69.2	休み時間まで待てない	26.7
講義を聞く気になれない	66.5	ノートをとる気になれない	26.6
講義のテーマが鮮明でない	58.2	学生全体を無視している	22.6
クラス全体が騒がしかった	46.6	学習意欲に変化はない	21.4
重要点がわかりにくい	45.8	熱意・熱心さに欠ける	20.0
ユーモアに欠ける	45.3	具体性に欠ける	20.0

授業の変化が乏しい	44.8	難しすぎる	19.0
親近感がわからない	43.4	教科書べったりすぎる	18.9
出席をとるためだけ	42.4	平凡すぎる	17.9
とにかく話がしたい	35.2	教師の話すペースが早い	17.2
親しさが無い	33.9	そのときにしか友達と話せない	12.4
教師の声量に欠ける	33.2	リラックスした雰囲気がない	12.2
板書の仕方が下手	31.8	授業に出席する気になれない	11.3

2-2. 私語への対応

- ・学生から教師へのアドバイス（島田，2002）
 - ・興味や関心をひく、楽しい・おもしろい・わかりやすい授業内容
 - ・注意の仕方の見直し
 - ・教授－学習過程全般の再検討
 - ・学生参加のある授業 等
- ・事前予防（新堀，1992）
 - 事前契約、学習負担の強化、視聴覚教材の活用
- ・その他
 - 学生参加型授業、警告、等

3. 沈黙を問い直す

3-1. 沈黙の理由

- ・質問をしない理由（祐宗ら，1994）
 - ・教師、まわりの学生がどう思うのか気になる
 - ・質問を悪口として受け取られること・目立つことを嫌がる
 - ・恥ずかしい、面倒くさい
- ・講義に対する質問への抵抗感（秋田，1995）
 - ・口頭と記述では記述のほうが質問の抵抗感が低い
 - ・「教師との対人関係」「まわりの人との対人関係」「モニタリングや質問方略の不足」「面倒さ」「自分で解決可能」
- ・発言のしやすさ（北川，2000）
 - 発言のしやすさは、「発言に対する自信が持てる」「発言に対する肯定的評価を得る」等と関係がある

3-2. 沈黙への対応

- ・前もって予告し準備させてから発言させる、質問に対して返事をする（祐宗ら，1994）
- ・発言のしやすさを促進させ、発言に対する自己効力感を上昇させる（北川，2000）
- ・恥の感情・体験に対して言語化・ユーモアを含めた受容的な率直な対処を促す（川崎，2008）
- ・その他
 - 学生参加型授業、発言を成績評価に加点、文字での発言の導入、等

4. 私語・沈黙の、学びへの積極的活用

4-1. 私語・沈黙の二つの側面

- ・消極的活用（事前防止、事中・事後禁止等）
- ・積極的活用（学習観の転換、活動の自己評価等）
 - 「つまずき」の積極的活用（駒林, 1982）
 - 学習観の転換としての「協同学習」（ジョンソンら, 2001）

4-2. 私語の積極的活用事例

(1) 授業の概要

- ・山形大学基盤教育教養科目「春からのキョウヨウ教育必勝法」
- ・選択科目、講義形式を中心とした授業、受講者数約 250 名（主に 1 年生、学部横断）
- ・大学教育、教養教育、大学生等に関する議論を聞き、自らの生き方を考える授業

(2) 私語の積極的活用の方法

- (a) 授業テーマのうち「私語」や「コミュニケーション」「学習活動」にかかわってくる諸概念を説明し、自分達のコミュニケーションや大学生活を考える機会を設ける（ワークシートに記述→全員で共有）
 - ・受動的消費者（リースマン, 1986）
 - ・大学生の「生徒化」、「まじめ」化（武内, 2005）
 - ・友達地獄（土井, 2008）
 - ・変貌するコミュニケーション、自己の「キャラ」化（鈴木, 2005）
- (b) 主要なテーマではないが、授業のあちこちに「私語」や「コミュニケーション」「学習活動」について考えるきっかけとなる話や活動を入れる（授業で扱ったテーマと関連づけることもある）
- (c) ペア・グループ・ディスカッションや質疑応答の機会を作り、「授業に関係のある」おしゃべりや学生同士の仲間意識を作り出す

4-3. 沈黙の積極的活用事例

(1) 授業の概要

- ・山形大学基盤教育教養科目「秋からのキョウヨウ教育必勝法」
- ・選択科目、演習形式の授業、受講者数約 30 名（主に 1 年生、学部横断）
- ・自分の知りたいことについて（何でも良い）主に授業時間外で探究し、それを授業時間内でプレゼンテーションし合い、グループディスカッションを行う（4～5 名 1 グループ、5 分間プレゼンテーション＋5 分間の意見交換）
- ・学習目標を共有する（「探究力、主体性・責任性、コミュニケーション・プレゼンテーション力、多様な価値観、情報収集・分析力、等を育成する」「やりたいこと・知りたいことを見つける」等）

(2) 沈黙の積極的活用方法

- (a) 「うまくいかないこと」「恥ずかしいこと」を認め合える環境を作る
- (b) 「発言が苦手」「発言をしないこと」のメカニズムを説明する
- (c) 学習に関するセルフ・マネジメントをさせる

引用・参考文献

- 秋田喜代美「入門としての「心理学」に対する授業観と質問行動」日本教育心理学会総会発表
論文集 (37), 124, 1995 年 .
- 土井隆義『友達地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書, 2008 年 .
- ジョンソン, D. W.・ジョンソン, R. T.・スミス, K. A. (関田一彦監訳)『学生参加型の大学授
業―協同学習への実践ガイド』玉川大学出版部, 2001 年 .
- 川崎直樹「大学生の質問・発言行動と恥への対処行動との関連」人間福祉研究 11, pp149-157,
2008 年 .
- 北川智之「大学生の発言不安と自己効力感について」日本教育心理学会総会発表論文集 42, 405,
2000 年 .
- 駒林邦男『つまずきを生かす授業』あゆみ出版, 1982 年 .
- 無藤隆、久保ゆかり、大嶋百合子「学生はなぜ質問をしないのか？」心理学評論 23(1), pp71-88,
1980 年 .
- リースマン, D. (喜多村和之ら訳)『高等教育論―学生消費者主義時代の大学』玉川大学出版部,
1986 年 .
- 島田博司『私語への教育指導―大学授業の生態誌 2』玉川大学出版部, 2002 年 .
- 新堀通也『私語研究序説―現代教育への警鐘』玉川大学出版部, 1992 年 .
- 祐宗省三、無藤隆、SHWALB, D.、SHWALB, B.、仲野好重「授業中における大学生の無質問
行動をめぐる教育心理学諸問題」日本教育心理学会総会発表論文集 (36), 34-35, 1994 年 .
- 鈴木謙介『カーニヴァル化する社会』講談社, 2005 年 .
- 武内清編『大学とキャンパスライフ』上智大学出版, 2005 年 .

大人数授業をいかに魅力的な「場」としてデザインするか？

早稲田大学 人間科学学術院 准教授

尾澤 重知

大人数授業を いかに魅力的な「場」と してデザインするか？

早稲田大学人間科学学術院

尾澤重知

ozawa [at] waseda.jp

Twitter: @ozashige

自己紹介

- 名前: 尾澤 重知(おざわしげと)
- 所属: 早稲田大学
人間科学学術院 准教授(人間情報)

高等教育における教授法開発
(グループワーク、協調学習)

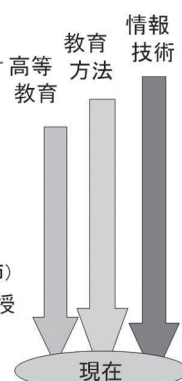
ICTを用いた
学習支援
テクノロジーの活用

キャリア教育
企業/大学内の
人材育成

2

略歴

- 慶應義塾大学環境情報学部
- 北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科 博士前期課程
- 同 博士後期課程(博士:知識科学)
- 早稲田大学
人間総合研究センター(助手)
- 安田女子大学・短期大学 保育科(講師)
- 大分大学高等教育開発センター准教授
- 早稲田大学人間科学学術院 准教授



早稲田大学人間科学部

- 人間科学部
 - 1987年設置。「情報」「健康福祉」「環境」の3学科で構成。1学年約700人(約2800名)
 - 修士課程、博士後期課程設置
- 通信教育課程(eスクール)
 - 2003年設置(9年目)
 - 学科構成や、学費など通学と同等
 - 学部のみ。1学年140名前後(約800名)

4

主な担当授業

	開講開始 学期	科目名	受講者数	備考
講義	2007年～ 前期	情報と職業	300名 通信80名	通学ビデオ収録
	2011年～ 夏期集中	情報社会及び 情報倫理	30名 通信50名	通学ビデオ収録
	2010年～ 後期	学習環境デザイン	200名 通信80名	通学ビデオ収録
演習 ゼミ型	2010年～ 後期	実験調査研究法 (学習環境デザイン)	40名	2コマ連続。 本学独自の演習型
	2010年～ 通年	ゼミ	24名 通信10名	2コマ連続 卒業論文指導
	2010年～ 前期	基礎演習 (クラス担任)	40名	初年次教育 科目担当は2年に1回
	2010年～ 後期	学習環境 デザイン特論	10名前後	大学院授業

最近の問題意識

- 各種教材(オンデマンドビデオ等)で
「いつでも誰でもが学べる時代」
 - 「支援の仕組み(メンター等)が整備されれば、従来型の授業は不要」になるはず。
 - クリステンセンら(2008)、向後(2010)
- 「集合」「対面」「1回90分」「15回」
授業という「場」をいかに活用するか？

6

- 「私語」「沈黙」をいかに超えるか
 - ー授業でのルール of 適切な説明
 - ー当該コミュニティにとって適切なツールを用いた学生参加と、知識共有促進
 - ー限られた時間であっても共同的な活動、知識の応用が可能な演習

第1章

報告者はどのような工夫をしているか？

1

大人数授業の例

- ・情報と職業
 - －前期開講
 - －約250～300名弱
- ・テーマ
 - －情報系企業（Amazon、Apple、Google、楽天...）
 - －キャリアデザイン
- ・学習環境デザイン
 - －後期開講
 - －約150～200名弱
- ・テーマ
 - －学習環境デザイン
 - －大学や企業内での人材育成な

学年(1~4年)、男女比はほぼ類似

10

- ・情報と職業（07～09年非常勤、10年～常勤）
 - －07年夏期集中 約60名
 - －08年夏期集中 約75名
 - －09年夏期集中 約60名 } 非常勤
- －10年前期 約250名
- －11年前期 約280名

- ・学習環境デザイン（10年～常勤）
 - －10年後期 約140名
 - －11年後期 約160名 } 常勤

11

TOP

面白い
授業

1 情報と職業
滝澤重知

2 行動療法
堀江正史

3 学校カウンセリング
豊田利一・高橋

情報と職業が初ランク
インにして堂々の1位。学生
に考えさせる、Twitterを
使うといった従来とは違っ

ロコミは、「単位が取れば良い」という風土を助長させている面もあるが、いい授業と出会いたい気持ちも。

12

授業方法の特徴

- (1) 学生参加の基本的な仕組み
- (2) 講義と演習の組み合わせ
- (3) 演習課題の工夫
- (4) 事例と理論の循環
- (5) 意見等の収集とフィードバック

13

授業方法の特徴(1) 学生参加の基本的な仕組み

- 挙手、机間巡視と指導(ワイヤレスのマイク・マウス前提)、マイクでの発言



授業方法の特徴(2) 講義と演習の組み合わせ

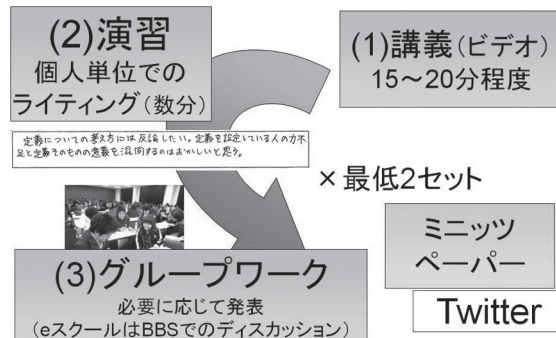
- 知識伝達と知識構成型授業の融合

講義型
議論に必要な
知識や視点、事例
プリント配布等も)

知識構成
いわゆるアクティ
ブラーニング。
自身で考えて、
ディスカッション。

15

授業の構造(収録型授業)



授業方法の特徴(3) 演習課題の工夫

- 現実との接点を意識した課題
 - 授業で学んだ知識を元に自ら考えることができるテーマ
 - 議論の多様性が生じるテーマ

17

授業スライド

演習(1) 英語学習における「方法」

- 皆さんは、大学受験、TOEIC対策、授業等で、どのように「英単語」を学習してきましたか？
 - これまで使ってきたツール(参考書、ノート等)
 - 具体的な活動(勉強法)を演習欄に記入してください。

18

英単語学習の時代的な流れ

ABC順
ソーナダイク
基本英語単語
赤尾の豆単
(1934/1942)

頻度順+α
試験に出る
英単語、
ターゲット1900
(1967/1982)

長文・単文
埋め込み型
速読英単語
DUO
(1992/1994)



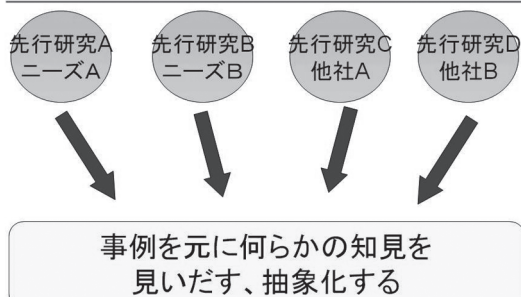
授業方法の特徴(4)

事例と理論の循環

- いわゆる「演繹法」的展開と「帰納法」展開の組み合わせ
 - ー演繹的: 理論を先に教えた後に、演習で各自の経験と重ね合わせ
 - ー帰納法的: 演習で経験を言葉にさせた後、理論と重ね合わせ

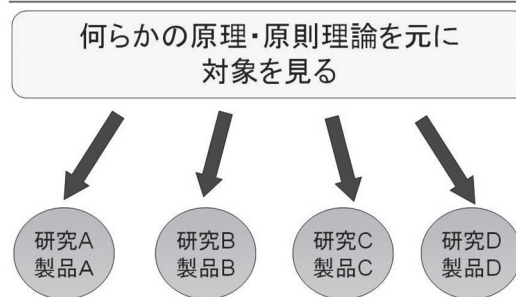
20

帰納法的学習(具体例から学ぶ)



21

演繹法的学習(原理・原則から学ぶ)



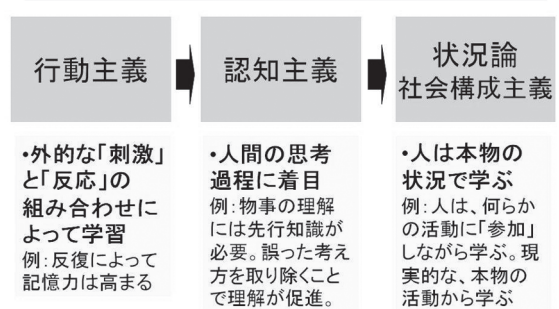
22

英語の「学習法」と「教授法」

- 英語をいかに他者に教えるか？
 - ー単語・文法単独(要素重視)
 - (1) とにかく単語・文法を学習させる
 - (2) 試験に出そうな領域から学習させる
 - ー単文・長文埋め込み(複合型)
 - (3) 単文の読解を通して学習させる
 - (4) 長文の読解を通して学習させる
 - ー留学・社会経験(社会経験型)
 - (5) 留学。英語が必要な状況で学習。

23

「学習観」の変遷



教育方法の特徴(5) 意見等の収集とフィードバック

- 学生からの意見・情報収集と
そのためのテクノロジーの利用
-ミニッツペーパー、演習プリント
-大教室授業でのTwitter活用

25

授業スライド

演習・ミニッツペーパーの記載例

(3) その他、授業に対するコメント、感想、意見などがあれば自由にお書きください。

有害情報のことや、ネット上の犯罪(脅迫やいじめなど)など、ここまで詳しく話を聞いたのは今回の鈴木さんの講義が初めてだったので非常に興味深かったです。丁寧な講義をありがとうございました。

定義についての考え方には反論したい。定義を設定している人の力不足と定義そのものの意義を混同するのはおかしいと思う。

個人情報を何気なく発信していることが、それほど個人と特定することができないというのが怖いと思いましたが、鈴木さんが授業されたような「フィードバック」が出来たら、有害情報とみなされる情報を発信しようとしても、出来ないような仕組みがあれば、もう少し有害情報が減るのかもしれない。しかし「クレーゾン」が、とても怖いので、書きたくない。記入、お疲れさまでした。

授業スライド

演習(1)皆さんにとっての Apple と Sony のイメージ(集計)

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> • デザイン、デザイン性 • シンプル • 新しい • 高い • スタイリッシュ • 最先端 • おしゃれ • 機能 • 商品 • ジョブズ • カッコいい | <ul style="list-style-type: none"> • 日本、日本企業 • ウォークマン • 強い • デザイン • 良い、よい • 高い • 音楽プレイヤー • テレビ • 機能 • 音質(よい) |
|--|--|

27

授業スライド

例年寄せられる質問・指摘

- 「目標」や「夢」は持たなければ、
ならないのか？
-自分には「転機」「節目」(挫折)の
ようなものがない...
- 塾講師経験のある通学生や、
eスクール学生の中には...
-「目標」「夢」を持たない生徒や、
新入社員をどう扱えば良いのか？

28

授業スライド

twitter 利用について



- Twitter
= ミニブログ
140字以内で
「今」を表現
- ソーシャルネ
ットワークと
チャット的な
融合メディア

29

授業スライド

twitter 利用ルール

- ハッシュタグ #led2011
- 投稿ローカルルール
 - (1) 授業内容について質問・疑問
 - (2) 授業内容を発展させる追加情報
 - 例: こんな視点もあるんじゃない?
 - (3) 授業全般に対する「ツッコミ」
 - 例: それは違うんじゃない?
- 全て記録・転用 = 発言内容に責任持つ

30

第2章

私語・沈黙対策

いかに改善に
取り組んできたか

31

大教室で私語問題に直面

- 情報と職業 (07～09年非常勤、10年～常勤)
 - 07年夏期集中 約60名
 - 08年夏期集中 約75名
 - 09年夏期集中 約60名
 - 10年前期 約250名
 - 11年前期 約280名
 - 学習環境デザイン (10年～常勤)
 - 10年後期 約140名
 - 11年後期 約160名
- とくに問題なし
- 改善余地

32

追加対策

- (1)「私語」「遅刻」等の定義の明確化
 - 遅刻者専用席、ペナルティ制度の導入
 - アシスタント(2名)によるマネジメント
- (2)簡易座席・完全座席指定
 - 説明の仕方を誤ると、逆効果。
 - 私語対策ではなく、「グループワークの活性化」のための導入

33

授業スライド

遅刻への扱い

- 遅刻とは
 - 授業開始以降の入室全て
- 遅刻者別席制度＋ペナルティ制度
 - 遅刻者は、全て指定された席
 - ・遅刻1回目：減点なし
 - ・2回目1.5回欠席、3回目3回欠席相当

公共交通機関の乱れは原則、遅刻として扱わない
(例：雨天時のバスの遅れは「遅刻」)

授業スライド

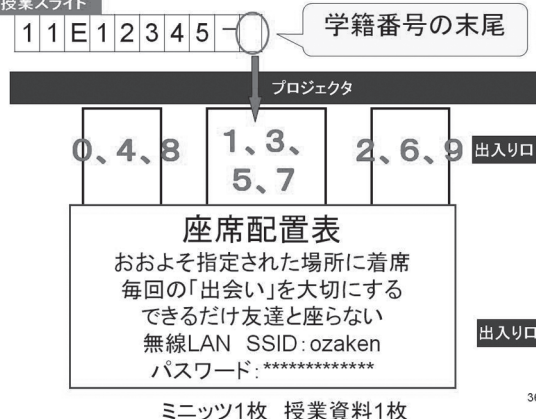
妨害行為への扱い(通学生のみ)

- 妨害行為とは
 - 私語など、授業の進行を妨げる行為
- ペナルティ制度
 - TA、教員が気づいた時点でチェック
 - 1回目：減点なし
 - 2回目最大15点、3回目30点減点

判断に不公平が生じるのは「想定内」
判断への不服は授業終了後、相談に応じる
授業中の異議申し立ては妨害行為と見なす

35

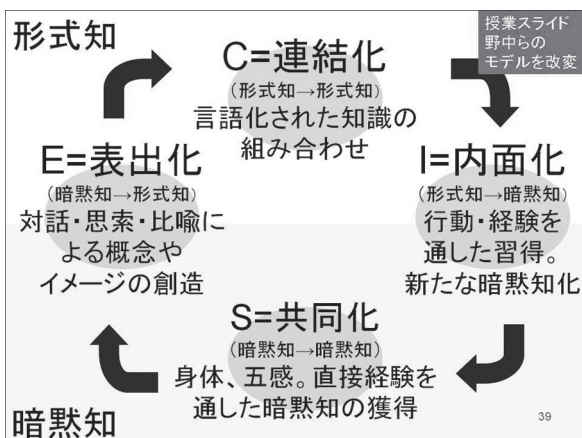
授業スライド



36

- ・授業の仕組み自体の開示
 - －(1) 学生参加の基本的な仕組み
 - －(2) 講義と演習の組み合わせ
 - －(3) 演習課題の工夫
 - －(4) 事例と理論の循環
 - －(5) 意見収集の方法とフィードバック

38



「落ちこぼれ」
(授業が難しい
と思う学生):
分からない
キーワード等に
言及。場合に
よって、その場
で回答

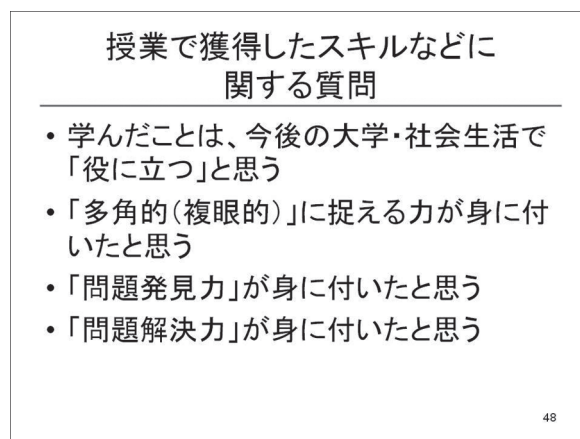
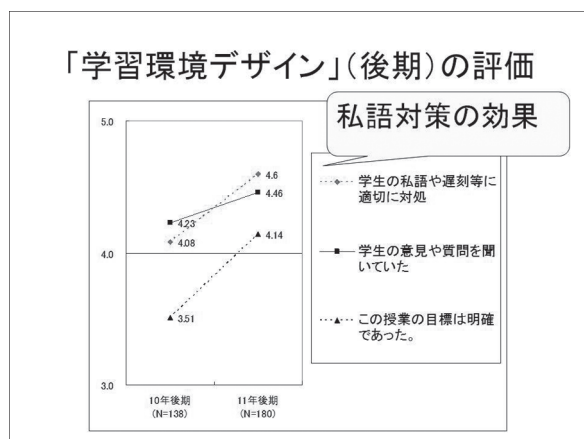
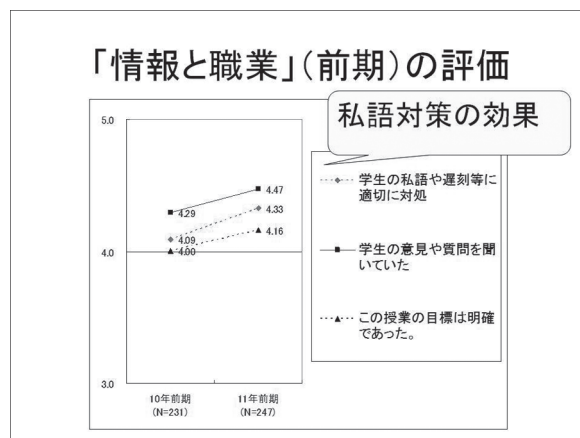
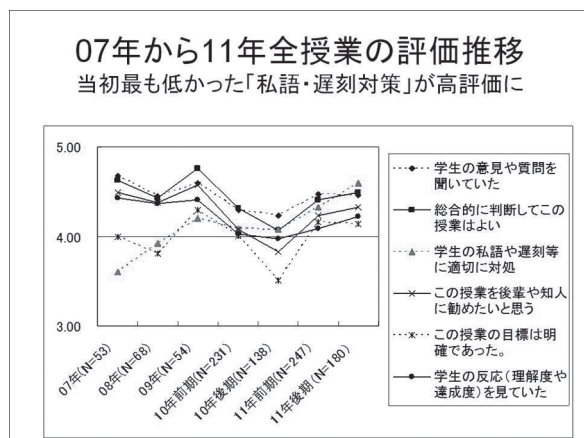
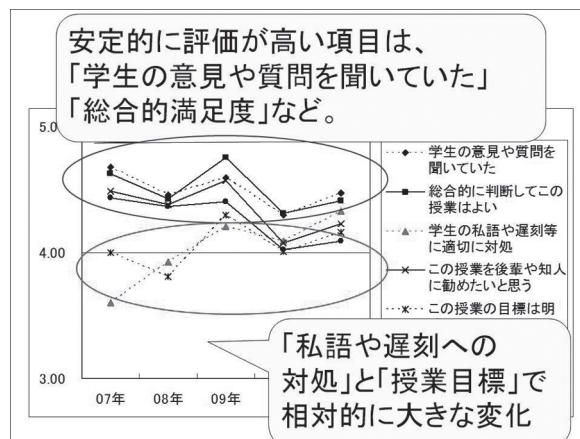
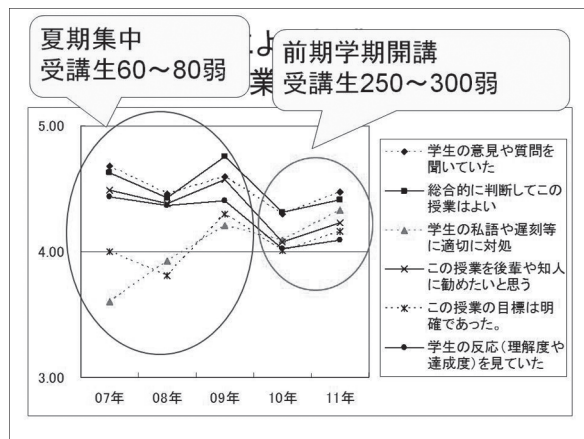
「吹きこぼれ」
(授業が簡単だ
と思う学生):
twitter上で発
展的な情報提
供
= 集合知的な
場づくりに貢献

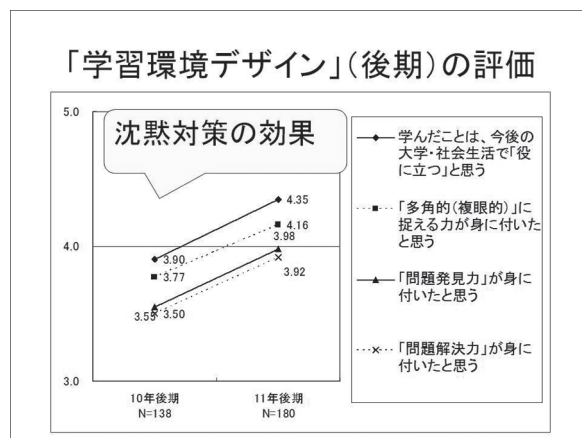
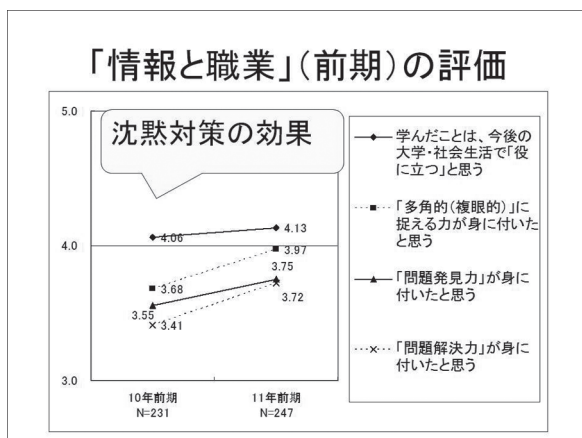
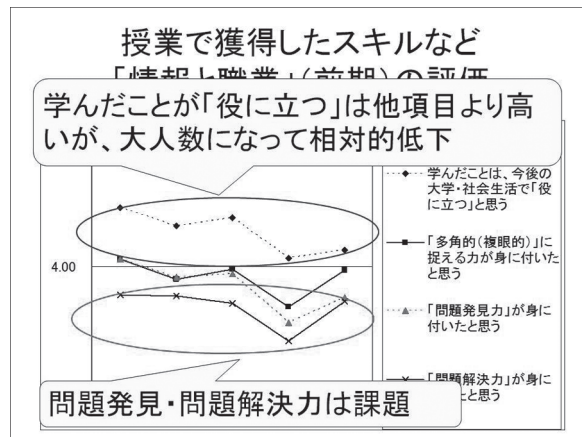
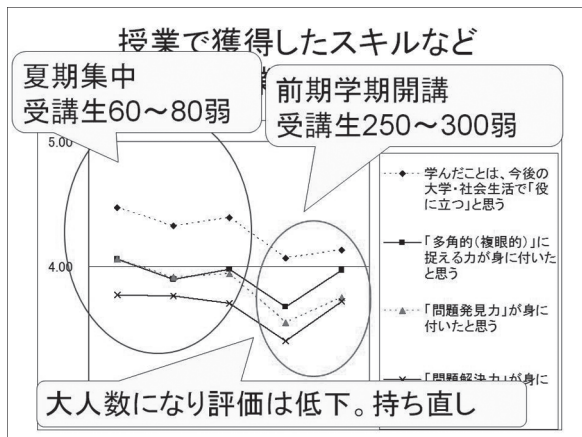
結果

41

(独自項目。大分大学の評価項目を主に利用)

- ・総合的満足度(全般、その他)
 - ー総合的に判断してこの授業はよい
 - ーこの授業を後輩や知人に勧めたいと思う
- ・教授法・目標・教室管理(授業内容等)
 - ー学生の意見や質問を聞いていた
 - ー学生の反応(理解度や達成度)を見ていた
 - ーこの授業の目標は明確であった。
 - ー学生の私語や遅刻等に適切に対処していた





主な結論

- 「私語」「沈黙」をいかに超えるか
 - 授業でのルール of 適切な説明
 - 当該コミュニティにとって適切なツールを用いた学生参加と、知識共有促進
 - 限られた時間であっても共同的な活動、知識の応用が可能な演習

授業共同体(コミュニティ)構築を目指す

今後の課題

- 学生のパフォーマンス(演習内容、最終レポート等の成果)の検討
 - 一部進めているが、毎回の授業の演習やミニツツペーパーは紙ベース回収のため、横断的比較がしにくい。
- 一部ブレンディッドラーニングの実施
 - 講義(ビデオ)→90分間グループワーク→講義(ビデオ)による効果検討

追加スライド

当日のディスカッション(1)

(いただいた一部の質問への回答)

- 【質問】グループワークのトレーニングは可能か
- 白熱教室のような授業
- 【回答】グループワーク(学生参加を促す工夫)は、どのような領域、内容の授業でも可能。数学、化学、工学分野でも優れた実践例は存在する。

55

追加スライド

当日のディスカッション(2)

(いただいた一部の質問への回答)

- 【質問】グループワークの工夫について。雑談か議論かの見極め。挙手、発言を促す方法
- 【回答】雑談にならないような課題設定の工夫(難しすぎる、抽象的過ぎる課題は雑談を生む)。その他、グループワーク時間内の机間巡視。授業内レポート。学生間の相互評価などの工夫が可能。

56

追加スライド

当日のディスカッション(3)

(いただいた一部の質問への回答)

- 【質問】Twitterについて
- 機器を持っていない学生への対応
- 【回答】Twitterの利用は任意。使いたくない学生は、紙に記入。
- タイムライン質問(Twitterと同様、疑問に思った時点での記入)
- Twitterで投稿した学生は、紙にIDを書くことで成績に反映。

57

追加スライド

当日のディスカッション(4)

(いただいた一部の質問への回答)

- 【質問】学生を集中させる方法(沈黙＝上の空で授業を受けているだけ)
- 【回答】学生に限らず、「人は誰でも飽きるものだ」という前提。断片化しすぎない範囲で、例えば「15～20分」を一セットとして、合間で息抜きができるような工夫。「講義→演習→グルワ」のリズムが定着すると学生にも良い「構え」ができる。

58

追加スライド

当日のディスカッション(5)

(全体のディスカッションテーマ)

- 【問い】なぜ私語をしてはいけないのか
- 【私なりの回答】授業に価値がないと思うのであれば、教室に来る必要はないはず。敢えて通信教育(放送大学など)を選ばず教室へ行くならば、何かを学ばなければ「もったいない」し適当にやって生き残れる世の中でもない。
- 私語があまりにひどい授業の場合は、教員や事務室に相談しよう。

59

追加スライド

当日のディスカッション

(学生に問いかけられたら)

- 【問い】なぜ沈黙してはダメなのか
- 【私なりの回答】失敗を恐れていては何も生まれない。グループワーク中、黙っていれば、確かに「失敗」を経験せずに済むかもしれない。しかし、それは直近で得られるはず「成功」を先延ばししていることでもある。一生懸命参加し、そして他者の話を聞く。練習から全て始まる。

60

プロジェクト科目事例報告

～授業の運営方法と学生の授業態度～

京都文教大学 人間学部現代社会学科 准教授

山本 真一

第17回FDフォーラム(於:京都産業大学)
第9分科会「大学における『私語』と『沈黙』」

プロジェクト科目事例報告 ～授業の運営方法と学生の授業態度～

2012年3月4日

報告者: 山本真一(京都文教大学人間学部)
s-yamamoto@po.kbu.ac.jp

報告順序

- ・はじめに—自己紹介—
- ・プロジェクト科目について
- ・授業の運営方法
- ・学生の授業態度
- ・私語と沈黙への効果

はじめに

- ・博士(経済学): 公共経済学、財政学
福井県立大学経済学部卒業
修士課程では理論経済学を、博士課程では公共経済学を専攻
- ・京都文教大学人間学部現代社会学科
学問領域は社会科学中心(経済学、経営学、法学、政治学、社会学など)
担当科目: 公共経済学、公共政策、経済学
プロジェクト科目、エクスターンシップ実習など

プロジェクト科目について

- ・全学共通科目の中の現場実践教育科目の1つ(他に、インターンシップ、ボランティア演習など)
- ・教育目標: 現実社会のニーズを捉える力の獲得
- ・2年次より履修
- ・今年度より開講

プロジェクト科目について(つづき)

- ・教育方法:
＜前半＞学生たちに実社会での現場体験を積ませる。並行して、各現場を取り巻く産業界の仕組みや、様々な現代的課題を理解するための知識を教授する。
＜後半＞各現場から汲み取った情報を体系的知識と照らし合わせ、問題の発生構造や潜在ニーズを分析し、それらへの対策等を議論する。

担当科目の概要

- ・テーマ: マーケットをサーチしよう!
- ・受講生 18名(現代社会学科13名、臨床心理学科4名、文化人類学科1名)
- ・到達目標: マーケットの機能、特に価格の役割について理解することを主眼に置く。

授業スケジュール

1	ガイダンス:授業概要の説明、アンケートの実施
2	講義と演習:市場とは?
3	店頭での価格調査(1)
4	講義と演習:市場における需要・供給行動について
5	講義と演習:市場における価格の決まり方
6	グループワーク(1):具体例による価格動向の分析
7	店頭での価格調査(2)
8	グループワーク(2):具体例による価格動向の分析
9	ミニプレゼン:具体例による価格動向の分析
10	店頭での価格調査(3)
11	グループワーク(3):調査結果の整理
12	グループワーク(4):調査結果の分析
13	グループワーク(5):プレゼンテーションの準備
14	プレゼンテーション
15	ふり返り

授業の運営方法

・授業方法:

＜前半3回＞講義＋演習・・・マーケットと価格をめぐる経済学の基礎的な考え方を伝えた後、それに関わる問題演習を行う。

＜前半・後半8回＞実習、グループワーク・・・店頭での価格調査を計3回実施し、その後、グループで調査結果の整理・分析を行う。

＜後半2回＞プレゼンテーション・・・グループワークの成果を口頭で発表する。

＜初回と最終回＞ガイダンスとふり返り

授業の運営方法(つづき)

＜講義＞

- ・ 講義時間の最小化
- ・ 演習時間の拡充
ex. 講義20分、演習35分、ディスカッション(解説)20分
- ・ 学生との対話(Q&A)

授業の運営方法(つづき)

＜演習＞

- ・ 個人単位ではなく、グループ単位での問題演習
- ・ グループ代表者による発表
- ・ 学生へのアドバイス
- ・ SA(スチューデント・アシスタント)の活用

授業の運営方法(つづき)

＜実習・グループワーク＞

- ・ 課題の意味と到達目標の確認
- ・ ワークの進捗状況の確認
→ 受講学生への指導の差別化
- ・ SA(スチューデント・アシスタント)の活用

授業の運営方法(つづき)

＜授業前後＞

- ・ 課題提出によりグループワークの達成度を確認
- ・ SAとの授業の打ち合わせ
→ SAとの話し合いによる前回の授業の課題の共有
→ 授業内容の改善
ex. 講義内容・レジュメ、受講学生への指導方法
演習で用いる問題の適性など

教員からみた学生の授業態度

<講義・演習時>

- ・ 講義への無関心 → 徐々に低下
- ・ 問題演習への集中とその持続
- ・ 私語はほとんどみられなかった(沈黙の発生)。

教員からみた学生の授業態度(つづき)

<実習・グループワーク時>

初回の実習:

- ・ 個々のメンバーの分業+コミュニケーションの不足



情報共有の欠如+他のメンバーへの非協力的な態度

第3回の実習:

- ・ 情報共有と、メンバー間でのコミュニケーションの活発化

教員からみた学生の授業態度(つづき)

<実習・グループワーク時>

- ・ グループワークの進捗に伴う学生からの質問頻度の増加
- ・ 課題提出の遅延ないし未提出

<グループ・ワークにおけるフリー・ライダーの発生

グループ	課題1 (第6, 8回)	課題2 (第11回)	課題3 (第12回)
A	○	○	△
B	○	○	○
C	○	×	×
D	○	○	×

教員からみた学生の授業態度(つづき)

<出席率>

- ・ 中盤での出席率の低下
←グループ・ワークにおけるフリー・ライダーの発生
- ・ 奇数グループと偶数グループとの間の出席率の格差

講時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	平均
出席率 (%)	78	83	83	67	56	72	78	39	56	39	61	61	56	67	50	63

私語と沈黙への効果

- ・ 講義と演習の組合せ(講義回数・時間の削減)
→ 私語の抑制に役立った可能性
- ・ グループ単位でのワークの実施
→ メンバー間でのコミュニケーションの促進
(沈黙の抑制、教員・SAへの質問の増加)
→ ワークへの参加度の向上
- ・ ワークにおける課題の意味と到達目標の確認
→ 課題に対する理解度の向上
→ ワークへの参加度の向上

今後の課題

- ・ 出席率の低下(特に、ドロップアウト)を食い止めるための方策
→ 評価方法の改善、開講時限の変更
講義内容の改善
- ・ 沈黙を減らすための講義方法の改善
→ Q&A方式の活用
→ 講義内容の低レベル化による、向学心のある学生へのディスインセンティブの問題